



格闘少年

丸出し
ムッチ

成人向
FOR ADULT ONLY

鬼虎が二連覇！【筍カップ】

今年の総合少年格闘技の頂点を決めるTKGグランプリシリーズ・筍カップの決勝戦が十二月十二日に筍スポーツセンターの第一体育館で行われ、昨年王者の長谷部武虎（はせべたけとら（一四）・武野鼓ジム）が二連覇を達成した。

昨年、彗星のように総合少年格闘技界に現れ、『鬼畜』とまで形容される超攻撃的なスタイルでいつしか『鬼虎』と呼ばれな

がら頂点を獲った長谷部武虎は、今年はさらにキレを増した技と、超が付く攻撃的なスタイルからは想像できないクレバーな試合運びで全勝街道を驀進し、この日の頂点を決める大一番でも憎らしいほど冷静に鬼畜の限りを尽くして試合を支配した。

今年デビューの新鋭ながら決勝戦に駆け上がった、挑戦者の飛鳥伸（あすかしん（一四）・筍学園）も、空手出身者ならではの攻撃力と肝の据わった大胆な戦術で鬼畜な虎に挑んで予想外

の善戦となったが、結局は終始、鬼虎の主導権を崩す事はできず、最後は実戦経験の差が出る形になってしまい、ノックアウトでマットに沈められた。

「来年は絶対、虎狩りします」

挑戦者の飛鳥は試合後のインタビューで、鬼虎の圧倒的な強さを認めながらも来年のリベンジを宣言した。

「強かったです、想像以上に。一般的なイメージとは違って緻

密な試合運びなのは判ってましたが、そもそもファイターとしての基本性能が上でした。今日は完敗です。でも来年は必ず上回って虎狩りします！」

完敗と言ったものの、鬼虎の猛攻を受け止めきった飛鳥の目は自信に満ちていて、来期の活躍を大いに期待させてくれた。

来期の総合少年格闘技界は、鬼虎という絶対王者を中心にさらにヒートアップするはずだ。

▼次ページ 鬼虎こと長谷部武虎選手に単独インタビュー ▲





二ア格闘技連

AKG

非常口 44

業

AKG

筒カップの二連覇を決めた翌日、長谷部武虎選手に、所属する武野鼓ジムで話を聞いた。

記者（以下、〓）おに、いや、長谷部選手、筒カップ二連覇おめでとうございます。見事な勝利でした！

長谷部選手（以下、鬼虎）ありがとうございます。っていうか、今、『おにとら』って言いかけただろ（笑）

〓あわわ、ごめんなさい！

鬼虎 いいよ、もう。実際、どこの記事も『鬼虎』としか書いてないし（笑）

〓はいそうですね。（即答）

鬼虎 あ、このやろ（笑）

〓やはり嫌ですか？鬼虎は。

鬼虎 いや、実は気に入ってる

んだよね。今では、むしろ名前と呼ばれるほうが違和感がある。〓そうだったんですか！じゃあ今後は遠慮しません（笑）

鬼虎 したくないだろ！

「そういうヤツを押し折って潰すのが快感なんだけど」

〓今日も、その鬼虎の名に恥じない圧倒的な試合でした。

鬼虎 いや、正直な話、予想以上に手こずったね。瞬殺するつもりだったけど、とんでもなかった。飛鳥はまだまだ強くなる。俺も、もっと精進しないとね。

〓試合の立ち上がりから、ずっと主導権を握って優位に試合を進めていた印象ですが？

鬼虎 確かにそうなんだけど、

あれだけ叩き込んでも折れなかったヤツは初めてだよ。とにかくタフだった。身体もメンタルも尋常じゃないね。

まあ、そういうヤツを押し折って潰すのが快感なんだけど。

〓鬼畜らしい発言、ありがとうございます。太字で使わせていただきます（笑）

鬼虎 あ、しまった。

〓そんな、素で鬼畜な鬼虎選手がファンは大好きなんですよ

鬼虎 そういうこと書くから、俺のことを、マジで鬼畜なゲス野郎だと信じる奴が出るんだ！

〓違うんですか？

鬼虎 よし、ちよっとリングに上がれ。身体に教えてやる。

〓ごめんなさい！ウソです
鬼虎 酷い話だぜ。リングで鬼

畜なのは認めるけど、普段は物静かで、虫も殺せない心優しい男の子なんだぞ？

〓はっ？

鬼虎 鼻で笑ったな！

〓すいません（笑）でも、試合で鬼畜なのは認めるんですね？

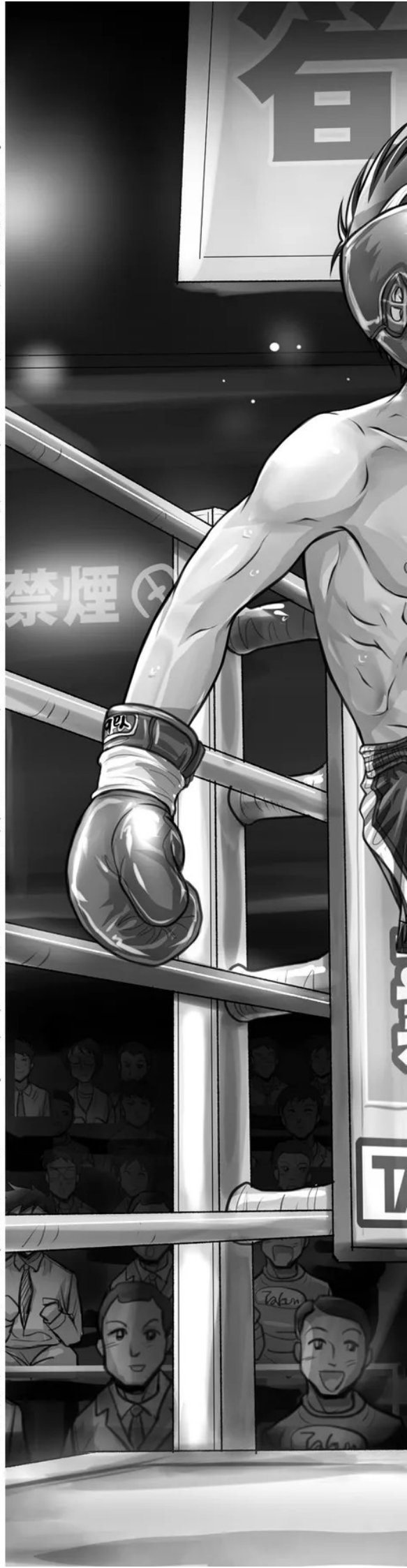
鬼虎 戦う以上、勝つために、できる事を全てやるのは当然だ。それを鬼畜と言うならその通り。

〓大勢のファンもその事をちゃんと理解してくれていますね。

鬼虎 だといけれど。誰かさん達が、それを台無しにしようとするんだよなあ。

〓なんで、僕を見るんですか？

リングの外では、実は楽しい少年の鬼虎選手との放談はさらに続いたが、紙面の都合で続きは本誌WEBで！





箱カップの二連覇を決めた翌日、長谷部武虎選手に、所属する武野鼓ジムで話を聞いた。

記者（以下、〓）おに、いや、

長谷部選手、箱カップ二連覇おめでとーございませす。見事な勝利でした！

長谷部選手（以下、鬼虎）ありがとーございませす。つていうか、今、『おにとら』つて言いかけただろ（笑）

〓あわわ、ごめんなさい！

鬼虎 いいよ、もう。実際、どこの記事も『鬼虎』としか書いてないし（笑）

〓はいそうですね。（即答）

鬼虎 あ、このやろ（笑）

〓やはり嫌ですか？鬼虎は。鬼虎 いや、実は気に入つてる

んだよね。今では、むしろ名前で呼ばれるほうが違和感がある。〓そうだったんですか！じゃあ今後は遠慮しません（笑）鬼虎 したくないだろ！

「そういうヤツを押し折つて潰すのが快感なんだけど」

〓今日も、その鬼虎の名に恥じない圧倒的な試合でした。

鬼虎 いや、正直な話、予想以上に手こずつたね。瞬殺するつもりだったけど、とんでもなかった。飛鳥はまだまだ強くなる。俺も、もっと精進しないとね。

〓試合の立ち上がりから、ずつと主導権を握つて優位に試合を進めていた印象ですが？鬼虎 確かにそうなんだけど、

あれだけ叩き込んで折れなかつたヤツは初めてだよ。とにかくタフだった。身体もメンタルも尋常じゃないね。まあ、そういうヤツを押し折つて潰すのが快感なんだけど。〓鬼畜らしい発言、ありがとーございませす。太字で使わせていただきます（笑）

鬼虎 あ、しまつた。〓そんな、素で鬼畜な鬼虎選手がファンは大好きなんですよ。鬼虎 そういうこと書くから俺のことを、マジで鬼畜なグス野郎だと信じる奴が出るんだ！

〓違うんですか？鬼虎 よし、ちよつとリングに上がれ。身体に教えてやる。〓ごめんなさい！ウソです鬼虎 酷い話だぜ。リングで鬼

畜なのは認めるけど、普段は物静かで、虫も殺せない心優しい男の子なんだぞ？

〓はっ？鬼虎 鼻で笑つたな！

〓すいません（笑）でも、試合で鬼畜なのは認めるんですね？鬼虎 戦う以上、勝つために、できる事を全てやるのは当然だ。それを鬼畜と言うならその通り。

〓大勢のファンもその事をちゃんと理解してくれてませすね。鬼虎 だどいいけど。誰かさん達が、それを台無しにしようとするんだよね。〓なんで、僕を見るんですか？リングの外では、実は楽しい少年の鬼虎選手との放談はさらに続いたが、紙面の都合で続きは本誌WEBで！

「ありがとうございます。最後に何枚か写真をお願いします」

インタビュー開始から丸々一時間、最後はほとんど雑談になってしまったインタビューを切り上げたスポーツ雑誌『週刊筒スポーツ』の記者の石川健史は、カメラをバッグから取り出した。

「こんなんで記事になるのかよ？」

呆れる武虎に、記者は自信満々に頷く。

「お約束や綺麗ごとばかりで、相手が誰でもほとんど同じ内容のインタビュー記事は、もう誰も読んでくれないからね！」

この記者は、武虎が公式戦デビューする遥か以前からの付き合いで、良くも悪くも、お互いに本音を隠さない間柄だ。

「トロフィーも持とうか？」

「そうですね」

武虎は、写真撮影用にジャージを脱いで、試合と同じ上半身裸にフアイトショーツという姿になると、リングに上がり、優勝メダルを首にかけて、グローブを履いてから優勝トロフィーを持ってポーズをとる。

「はい！視線もこっちに」

記者の石川は、角度を変えながら連射モードで何回かシャッターを切ると、手短にカメラのモニターを確認して頷いた。

「…うん、OK。試合の翌日、しかもジムも休みの日に悪かったね」

「この貸しはデカイぞお！」

茶化して言う武虎に、石川は軽口で応えながら手を差し出す。

「おお怖い怖い！『次』の試合も期待しているよ！」

武虎と石川は、目を合わせてニヤリと笑い合って握手した。

「どうせ、ロクでもない事を『期待』してやがるくせに」

石川を見送った武虎は、意地悪く笑って呟く。

「まあ、いいや。さっさと着替えてロードワークに行こう」

「とら兄ちゃん！」

「うおっ！」

フアイトショーツを脱ぎかけていた武虎の裸の上半身に、背後から短髪で小柄な少年が飛び付いてきた。

「なんだよケンシロ！アブねーなっ！っ：ておい？なんでマッ裸なんだよ！チンポが背中に当たってるじゃねーか！」

所属ジムの後輩で、小学六年生の相良健史郎（さがらけんしろう）に全裸で抱きつかれた武虎は、さすがに驚いて慌てた。

「約束だよ！オナニーして見せてよ！」

「えっ？…あっ」

健史郎の言葉に一瞬だけ戸惑った武虎は、すぐに何かを思い出して露骨に『しまった』という顔をする。

「はいはい、思い出したところで、さっさとチンポ出そうね！」

そう言いながら、今度は前から、同じく後輩で中学一年生の水瀬輝（みなせてる）が武虎のフアイトショーツをアンダーウェアごと一気に下ろそうと手をかけてくる。

「おいおいっ！」

不意を突かれた武虎は、ほぼ抵抗できずにチンポを丸出しにされた。「はい御開帳おく！さすがっ！ズル剥けのデカちゃんだあ！」

健史郎と同様に全裸の輝は、露になった武虎のチンポに遠慮なく顔を近づけて、目を輝かせながら舐めるように武虎のチンポを見る。

「こんなに近くでじっくり見るのは初めてだけど、やつぱり、トラ君のチンポは大きくて形もいいね！勃起したら、もっと凄いやね！」

そう言っではしゃぐ輝の声に、武虎に背後から抱きついてぶら下がっている健史郎は、全裸の肉体をさらに武虎の背中に押し付けるようにして這い上がり、武虎の肩越しに前を覗き込むと抗議の声を上げた。

「テルちゃんズルイ！オレも、とら兄ちゃんのチンポ見たい！」

「ああもう！わかったから、二人とも、ちよっと離れろ！」



「まあ、確かに、今年もタイトルを獲得したらオナニーを教えてやる、と前にシャワールームで口走ったことは事実だからな」

「そう言いながら武虎は、ジムのリングの奥にあるトレーニングスペースの真ん中で全裸になった。」

LEDに変えたばかりの室内照明に、鍛え抜かれた形の良い筋肉に覆われた肉体と、そして年齢相応の陰毛、平常時でもポリウレーム感のあるズル剥けで形の整ったペニスと淫囊が照らし出される。

ここを選んだのは、周囲に窓が無く、外から見られることが無いためだが、普段、大勢の仲間とトレーニングしている場所で全裸になるのは、思った以上に違和感が大きかった。

「…考えてみれば、オナニーなら真裸になる必要は無くねえか？」

武虎の疑問に、健史朗も驚いて輝を見る。たぶん、輝に言われるまでに、全裸になっていたのだろう。

「だって、ちんちん弄るだけじゃ寂しいじゃない。雄っぱいや腹筋とか、全身をじっくりねっとり楽しもうよ」

悪びれずに言う輝に、武虎は苦笑する。輝は、黙っていればかなりの美少年なのに、口をひらけば、ただのエロい悪ガキなのだ。

「そうだな、そうするか」

そうして武虎は、期待と好奇心に満ちた目で自分の肉体を舐めるように見ている全裸の後輩二人の肉体を、逆にじっくり観察してやる。

「輝は、ようやく綺麗な腹筋がついてきたな。チン毛はまだか。半剥けのチンポは、ちゃんと皮を剥いて洗ってるか？」

「洗ってるよ！」

ちよっと本気で怒った輝にかまわず、武虎は健史朗の腹を右手で撫でて、包茎ペニスの下の淫囊の大きさを量るように手のひらに載せた。

健史朗は驚きながらも、おとなしく身を任せている。短髪で太い眉毛のいかにも悪ガキな人相だが、実は素直でやさしい子で、いつも年上の幼馴染である輝に、ワルい事を教えられているのだ。

「うん、腹筋も締まってきてるな。さすがにチン毛はまだ先っぽいけど、金玉もいい感じだ。もう射精はできるんだな？」

武虎の問いに、健史朗は頬を赤く染めて、コクコクと激しく頷いた。「ケンシロのチンポ、夢精では結構な量が出てるよ！一応、ボクが教えたオナニーもしてるけど、全然うまくいかないんだ」

急に恥かしくなったらしい健史朗は、顔を真っ赤にして黙ってしまったので、輝が楽しそうに暴露する。

「で、やっぱりトラ君に教えて欲しいんだ。まずは自慢してた『ノーハンドフル勃起』見せてよ！でそのあと、チンポ触らせて！」

目を輝かせて言う輝の表情は、健史朗の件はオマケで、実際は自分が武虎のチンポで遊びたいという本音を正直すぎるほど語っていた。

「まったく、エロい後輩を持つと大変だぜ」

武虎はそう言っただけでニヤリと笑うと、足を少し開き気味にして、両腕を上げてガッツポーズをとる。

「行くぜっ！」

軽く息を吐いた武虎が、一瞬だけ目を瞑って集中すると、次の瞬間には股間のズル剥けペニスがゆっくりと頭を上げ始めた。

「うわあ！」

健史朗が目丸くして食い入るように見るなか、アツという間に武虎のペニスは完全勃起する。

「これって、思い通りにやるのは結構難しいんだよ！さすがだね」
「そう言いながら輝は、まだ良いとは言われて無いのに、堂々と武虎のペニスと淫囊を両手で挿んで感触を確かめる。」

「ほらっ！ケンシロも触ってみなよ！やっぱり凄いや」

驚いた健史朗は窺うように武虎の顔を見る。

「いいぜ、好きだけ触れよ」

武虎が苦笑しながら頷くと、健史朗はパッと笑顔になって武虎のペニスと淫囊を触りまくった。



「なっ？トラ君のチンポは凄いでしょ？」

何故か得意げに言う輝に、健史朗は素直に感激した表情で頷く。

「うん、オレやテルちゃんのは全然違う！」

結局、五分以上、二人に好き放題弄られた武虎のペニスからは、透明な粘液がだらだら垂れているが、その量すら健史朗には驚きらしい。

「トラ君、じゃあ、そろそろオナニー見せてよ！」

そう無邪気に言う輝の頭を、武虎は拳で小突くと意地悪く言う。

「よし、お前の顔にぶっかけてやるから、顔を差し出せ」

「えええっ！いや、今日は、遠慮しとくかな」

「そうか、じゃあ今日はやめておくれ、必ずやるからな、約束だぜ」

慌てる輝の言葉尻を捕まえて武虎は通告する。逆襲だ。

「あうう…」

自分の失態に気付いて絶句する輝を見て、健史朗はニヤニヤ笑う。

「ようし！じゃあ、一発ぶっ放すぜ！良く見てろよ、お前ら！」

「うん！」

武虎は立ったまま、さらに足を開いてチンポを突き出すようにすると、完全勃起しているズル剥けペニスを右手で激しく扱きはじめた。

輝と健史朗に弄られて既に大量に垂れ流していた透明な粘液の、グチュグチュと卑猥な音が、二人しかいない休日のジムの中に響き渡る。

明るいLED照明が、全裸でペニスを扱く武虎を照らし出し、カウパー液に濡れたペニスがテカテカと光っている。

「…すげえ」

健史朗が思わず漏らした呟きに、輝も『エロいね』と小声で応える。

「…っそろそろ射くぞ！」

次の瞬間、武虎の尿道口からビュウっ！という音がしそうな勢いで大量の精液が噴出し、健史朗の足に掛かるほど飛距離を出した。

そして、独特の匂いが健史朗と輝を包み込む。

健史朗は、恍惚とした表情で包茎ペニスを完全勃起させていた。

「じゃあ、いいんだな？」

「うん！…お願います」

頬を赤く染めた健史朗は、緊張した声で小さく頷いた。

全裸で包茎ペニスを勃起させて直立不動の健史朗を、全裸でカウパー液で濡れたペニスもそのままの武虎が背後から抱きしめる。

「っんあ！」

健史朗は、背中と尻に当たる武虎の肉体の体温と、濡れたペニスの感触に悶えてますます呼吸が速くなる。

「へへっ、お子チャヤマな匂いに少しだけエロイ匂いが混ざってるな」

武虎は、露骨に健史朗の匂いをかぐ仕種をして茶化す。

「…とら兄ちゃんからはエロい匂いしかなくて、頭ぐちゃぐちゃ…」
泣きそうな健史朗の言葉にかまわず、武虎は健史朗の包茎ペニスを右手で扱き始め、同時に左手で健史朗の右乳首を弄った。

「っ！」

ビクツと身体を硬くする健史朗の耳元で、武虎はやさしく囁く。

「大丈夫だ。力を抜いて、全部俺に任せろ」

健史朗は素直に全身の力を抜いて全てを武虎に委ねる。

「ふっ、ああん！」

健史朗の肉体を受け止めた武虎は、強く抱きしめることで、左右の手だけではなく、自らの肉体も使って健史朗の全身を愛撫し、健史朗は呼吸を荒げて身悶えて、切なげに嬌声をあげていく。

「…ケンシロ、良かったね！ボクはケンシロのアへ顔で我慢するよ」
羨ましげにそう言う輝は、いつの間にか、自分の半剥けペニスを扱いて透明な粘液をだらだら垂らしていた。

「…っん、もうでるっ！」

悲鳴のように叫ぶと、健史朗は黄色く粘度の高い大量の精液を、まるで撃ち出すように激しく射精し、それに誘発されるように、輝も激しく射精して健史朗の足を汚した。



「テルちゃん、いいところってココ？何もやってないよね？」

大晦日の夕方、輝に連れてこられた場所に健史朗は困惑していた。

家族には『ジムの皆と遊んで、そのまま初詣に行く』と言って出てきたが、実際は幼馴染で家も隣の輝に『イイところに連れて行ってあげるから』と言われて来たのだ。

しかし、着いたのは半月前にも先輩の武虎の試合を見に来た『筍スポーツセンター』の第一体育館で、探しても開催イベントの看板やポスターはどこにも無かった。

「そうだよ。良く見てごらん」

輝に言われて改めて見ると、明らかにチケットを持った大勢の人々が続々と「第一体育館」に入っていく。

「あれ？」

ますます困惑する健史朗の前に、輝は一枚のチケットを差し出した。そして、そのチケットには見た事の無いイベント名が書かれていた。

【総合性少年格闘技グランプリシリーズ第6戦 公開処刑マッチ】

「…え？」

とっさに理解できずに固まる健史朗に、輝は笑いながら説明する。

「いわゆる、地下格闘技ってやつだよ、非合法の。実際は見てのとおりに、看板を出していない以外は、普通の総合少年格闘技と同じ会場で堂々とやっているけどね。年間6戦あって、今日はファイナルだよ」

驚愕して絶句する健史朗に、輝は平然とさらに凄いことを説明する。

「ぶっちゃけ、僕らくらいの年齢の男の子の肉体やセックスを見世物にしてるんだけど、そもそも非合法だから、未成年の僕らでも、お金さえ出せば堂々と見られるんだ。今日はボクが奢ってあげる」

輝は、戸惑う健史朗の手を引いて、入り口に向かう。

「ほら！見所の『計量』が始まっちゃうから急ごう！」

「ええ？『計量』が見所お？」

「そう！最高に面白いよ！」

「テルちゃん、コレって…」

「凄いでしょ！」

普通の総合少年格闘技の試合と同じように入場した第一体育館は、ロビーもいつもどおりだった。しかし、輝に連れられて入った『計量室』は、いつもの小会議室ではなく、試合では使ったことのない、かなり広い大会議室で、しかも、その中で行われる『計量』は健史朗の知っている『計量』とはまったく違っていった。

「…この人達、全員が選手だよね？」

呆然と呟く健史朗に、輝は楽しげに応える。

「そうだよ！ランキング上位の有力選手や、特別に申請して認められた選手は免除になってるけど、ほとんどの選手はこの『計量』兼『メデイカルチェック』を受けることが義務なんだ」

大きな会議室には、健史朗も知っている体重計以外にも多くの見た事の無い器具がたくさん置かれていて、その器具の向こう側に二十人ほどの選手らしき少年達が一列に整列していた。

そして、その選手全員が全裸で、しかも、誰一人として手でチンポを隠すことなく、丸出しのまま直立していた。

「…あ、それで…」

健史朗は、大会議室の壁に何枚も貼られた『メデイカルチェック中は股間を手で隠さぬ事』という張り紙に気付いて絶句する。

健史朗と輝以外にも大勢の観客が大会議室にいて、全裸の少年選手達を情け容赦なく撮影しまくっている。

「そろそろ始まるよ！」

揃いのTシャツを着たスタッフが大勢現れて、それぞれの器具の配置についていき、最後の一人が持ち場につくと、整列していた全裸の少年達の中で中央にいた泣きボクロの美少年が大きく一歩前に出た。

細身ながら形が整い良く締まった腹筋と、無毛ながら包茎ながら体格の割にボリューム感のあるチンポなど、肉体的にも極上な少年だ。

その美少年が、スタッフの合図で全裸のまま自己紹介を始めた。

「箭学園の友田章（ともだあきら）です！中学校一年生です！オナニは毎日一回してます！アナルセックスは経験済みで、初体験の相手は部活の先輩です！今も毎週一回くらいお尻を犯してもらってます！チンポを入れるほうはまだ未経験です！」

章は、一気に捲し立てると、顔を真っ赤にして一礼して下がる。

そして、次の少年が一步前に出て、同じように全裸で自己紹介をして、自らの性的秘密を大声で告白していく。

「テルちゃん：！」

あまりに刺激的な光景に、健史朗は興奮して輝の腕を掴んで叫ぶ。

「ふふふっ、でも、まだまだ本番はこれからだよ？」

輝は、健史朗の様子に満足げに頬笑みながら、健史朗に耳打ちする。

「つえ：！」

全ての選手が自己紹介を終えると、観客から拍手と歓声、そして下品な野次が沸き起こる中、選手達は駆け足で数多くある器具に均等に分かれて駆け寄り、その前に整理していく。

「これから公開で計量とメディカルチェックだよ、全ての選手が、三種類全ての器具で検査を受けるんだ」

輝の説明に、健史朗は首を傾げて素朴な疑問をぶつける。

「検査って何をやるの？ここの器具は見た事の無いやつばかりだよ」

「ああ、そうか。じゃあ全部説明してあげるね！」

そう言うと、輝は会場の『検査器具』を指差しながら、話し始めた。

「検査は全部で三種類。一つ目は『三角計量台』。計量台自体は表の公式戦でもある体重を量る器具だけど、コレは、見ての通りそれだけじゃなくて、選手が座る部分が鋭角な金属板になっていて、座ると自分の体重で金属板が股間に食い込んですごく痛い！しかも、金属板には断続的に高圧電流が流されていて、お尻と太もも、そして金玉に電流が流れると、鞭で打たれたみたいなのとショックと激痛が襲って、思わず

身体が跳ね上がるんだ。それと選手はお尻の穴にローターを入れられて強制勃起させられているから、勃起したオチンチンが電撃のたびにポンポン跳ねちゃう。で、その様子がまるでロデオみたいだからって、お客さん達には『チンチンロデオ』って言われて凄く人気がある『検査』だけど、やるほうは超辛いよ。ちなみに、一人最低でも五分以上は『チンチンロデオ』をやらされるよ」

「二つ目は、『アナルメーター』。見ての通り、目盛りのついたホースみたいな器具をお尻の穴に入れて、直腸の長さ、というか、オトコのペニスを挿入できる深さを測るんだ。ホースの先端にはカメラとライトがあつて、文字通りおなかの中、腸壁の画像もバッチリ大公開されちゃうよ。しかも、検査委員さんがテクニシャンで、前立腺とか、その選手の弱いところを瞬時に見抜いて的確に抉ってくるので、選手は必ず射精させられちゃう。お客さんは、検査中なのに、お尻を弄られて無様にアへ顔を晒して射精する選手の恥かしい姿を喜ぶんだ」

「三つ目は、『チン負荷検査』。選手のオチンチンチンにいろんな負荷をかけて遊ぶ検査で、選手を鎖で海老反りで吊り上げて、まずはペニスに紐をかけて重りで引つ張っていく。で伸びきった限界を測るんだ。その次は金玉で、こっちにも重りを下げて、限界重量を測る。どちらも観客に重りを乗せさせてくれるから、気に入った選手のオチンチンを自分の手で直接いじめられるって大人気なんだ。やられるほうは、電気責めとは別の種類の激痛に発狂しそうになって、本気でオチンチンが潰れる、取れる、と思つて泣き叫んじゃうけど」

言い終わった輝は、なぜか苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「…テルちゃん、詳しいんだね」

凄すぎる話に驚くばかりの健史朗は、そう言うのが精一杯だ。

「…まあね。とにかく、観客は目の前でその様子を楽しめるって事ももちろん、全て撮影されていて、会場内の各モニターでも見られるけどね。せっかくだから、生で見ようよ！」

ボディカルチェック中は
股間を手で隠さぬ事







「テルちゃん、帰ってこないなあ…」

スマホを見ながら、健史朗は心細げに呟く。

二人で阿鼻叫喚の『計量』という名の少年拷問ショーをたっぷり楽しんで後、第一試合が始まる直前になって、輝は突然、ちよつと用事があると言つて健史朗を観客席に置いてどこかに行つてしまったのだ。

結局、第一試合が始まって輝は戻つてこないばかりか、ラインにも応答が一切無いまま、既に第五試合まで終わつてしまった。

最初は、満員の会場でありながらリングサイドという特等席の前で繰り広げられる少年達のエロあり笑いありの地下格闘技試合に夢中になつていた健史朗も、さすがに少しだけ心配になつてきた。

「どうしたのかな？こんな面白い試合を見ないなんてもったいない…」

健史朗は、非合法の地下格闘技と聞いて、しかも、あんな壮絶な『計量』を見たあとでは、試合も暗くて悲惨なものを想像していたのだが、実際に初めて見た『地下格闘技』は、想像とはかけ離れた立派なエンターテイメントだった。

確かに、全ての少年が最終的にはリング上で全裸にされてチンポを晒すし、敗者の少年が、勝者の少年にリング上でアナルを犯され、腸内に直接射精されるのだが、試合ごとに『設定』と『演出』が異なつていて、『宿命のライバル』や『実は恋人同士』等、コミカル風にホラー風、あるいは本気の格闘技対決もある。

着ているファイトショーツも、褌や紐パン、極薄ビキニやペニスにリボン巻いただけ、など様々だった。

「あ、もう第六試合が始まっちゃう」

リングにレフェリーが上がりマイクを持った。

『それでは、第六試合を開始します！青コーナー！木野鼓ファイトクラブ所属、真山竜司、中学校一年生！』

青コーナーから、細身ながら引き締まった筋肉のついた凛々しい少年がリングに上がる。ファイトショーツはごく普通のモノだ。

『赤コーナー！武野鼓ジム所属、水瀬輝、中学校一年生！』

レフェリーのコールを受けて、意気揚々とロープを飛び越えてリングに上がった少年を見て健史朗は驚愕する。

「つて、テルちゃん！」

やはり普通のファイトショーツ姿の輝は、赤いグローブを軽く上げて、健史朗に目配せして得意げに笑う。

レフェリーがお約束の仕種をして右手を上げると、ゴングが鳴った。「うっわ！」

健史朗は思わず頓狂な声を上げる。

輝がゴングと同時に怒涛の攻めを仕掛け、相手を圧倒しているのだ。

もともと、かわいい顔に似合わず攻撃偏重のスタイルのだが、健史朗の知っている輝より、さらに数段キレていた。

相手の少年も決して弱い選手ではないことは、一応は経験者の健史朗にもわかったが、完全に輝にペースを握られてしまっている。

「…あつ！」

ゴングから一分も経たないうちに、会場に笑いと歓声が巻き起こる。輝と相手選手のファイトショーツがあつという間に破れ散つてしまひ、二人ともチンポが丸出しになつてしまったのだ。

一見、普通のファイトショーツに見えていたが、ごく薄く脆い紙で作られたペーパーショーツだったのだ。

しかし、リング上の二人は気にする素振りも見せずに激しく闘い続けていて、闘いに興奮して半分以上勃起している輝の半剥けペニスや、まだ勃起していない相手の少年の包茎ペニスが激しい動きに合わせてぶるんぶるんと振り回される様子は、闘い自体は真剣で激しい分だけ、かえつて滑稽で観客を沸かせた。

そして、熱く、恥かしい闘いは、輝の渾身のハイキックが相手の首を狩つて決着し、輝は、降り注ぐライトの中、リングの真ん中で堂々と相手の少年の尻を犯して、その中に射精して見せた。





「あゝあ、メインイベント始まっちゃった！」

さっきまでの前座とは違い、会場アナウンスと同時に照明が落とされて、まずは挑戦者が通る会場の入り口から青コーナーへの導線がライトアップされて軽快な音楽が流れ始めた。

結局、輝は試合終了も健史朗の元には戻ってこず、さらに三試合が行われて、ついに今日最後の試合が始まってしまったのだ。

「…テルちゃん、超カッコ良かったって言いたいのに」

健史朗がスマホを弄っていると、レフェリーのコールで挑戦者が入場してきて、会場が一気に盛り上がった。

「…ええっ！うっそお！どうしてあの人が！」

青コーナーからリングに上がった少年を見て、健史朗は愕然とする。そこには、半月前に武虎と総合少年格闘技で一番のタイトルである箭カップの決勝戦を戦った、箭学園の飛鳥伸がいるのだ。

飛鳥は、布の面積は大きいが薄くて透け気味で、しかも、かなりゆ

るい紐パン型のファイトショーツ姿ながら、箭カップと同じ真剣な表情でリングに立っていた。

「…あれ？」

表の総合少年格闘技界での有力選手の登場に会場は盛り上がったが、健史朗が思うほど意外だとの受け止め方はされていない雰囲気だ。

健史朗が戸惑っていると、今度は赤コーナーがライトアップされて、派手で卑猥な印象の音楽が一層の大音量で流れ始めた。

そして、レフェリーも負けじと大声でコールを始める。

『赤コーナー！今シーズンも無敗の絶対王者！メインイベントのみならず、エキシビジョンにも乱入しまくり、今シーズンだけで総勢二十三名の格闘少年をリング上で公開レイプしている、キングオブ・格闘少年レイプ！我らがセックスヒーロー！その名もレイプタイガー！』
物凄い紹介をされた、とんでもない名前の少年が、赤コーナーのポストに軽快に飛び乗って全身に強烈なスポットライトを浴びる。



ポストの上の少年『レイプタイガー』は、飛鳥と同じタイプゆるい紐パン型ファイトショーツの虎柄を着用していて、さらに虎柄のマントと虎柄のヘアバンドを身につけ、そして顔と両腕両足、胸とわき腹に虎の模様をペイントしていた。

今までとは比べ物にならない大歓声とヤジが会場全体を覆いつくす中で、悠然と微笑むその姿は、まさに絶対王者の貫禄だ。

「えええっ！…えっ？…ああああっ！」

健史朗は、まず奇抜な姿に度肝を抜かれ、次に違和感に気付き、そして、その少年の正体に気付いて愕然とする。

「…っ、と、とら兄ちゃん！」

呆然とする健史朗の前で、長谷部武虎ことレイプタイガーは、ゴングはまだ鳴っていないのに、突然、リングポストから飛び降りると、反動で紐パンからズル剥けペニスが見出たのにもかまわず、そのまま飛鳥に殴りかかった！



レイプタイガーの勝利に沸く会場に、甲高い断続的なゴングの音が響きわたると、会場は一転して静まり返る。

前座の試合の後も同じだったように、勝者による敗者処刑の合図だ。レイプタイガーはとぼけた表情で、ずっと出したままだった勃起ペニスをいそいそと紐パンの中に仕舞うと、結局、カウパー液で濡れた亀頭と右の金玉は紐パンから出たまま、観客の笑いを誘う。

そして、マットに横たわったままの飛鳥を覗き込み、意識があるのを確認すると、何かを短く会話してから、飛鳥の髪を掴んで引っ張り上げ、強引に飛鳥を立たせた。

残忍なやり方に観客がヤジと歓声で沸きあがる中、レイプタイガーはさらに乱暴に飛鳥の紐パンファイトショーツを筆取り、レイプタイガーのチンポにも引けを取らない大きさの、飛鳥のズル剥けチンポを観客に晒す。

そして、マイク無しで会場全体に届く大声で、獣のように勝利の雄叫びを上げてから、堂々と話し始めた。

「今日の狩りの獲物はコイツ、飛鳥伸だっ！今日は、前座の試合やエキシビジョンで男の子の尻をツマミ食いできなかったから、俺のキンタマの中のザーメンは全部コイツの尻の中にぶち込む！見ての通りかなりタフなオトコだから、もつと痛めつけて遊びながらブチ犯すぜ！」

レイプタイガーの宣言に観客は大きな拍手と歓声で応える。

「ああ、いわゆるマイクパフォーマンスなんだ」

最初はレイプタイガーこと武虎の過激な宣言に面食らった健史朗だったが、観客の反応をみて、これがいつものお約束なのだと気付いた。

しかし、その後のレイプタイガーの行動は宣言どおり、いや、それ以上に過激で、健史朗はそれに興奮を隠せない自分にさらに驚いた。レイプタイガーは、無抵抗の飛鳥のむき出しの尻を蹴り飛ばしてロープに押し付けると、飛鳥にチンポを突き出させて、リングサイドの観客に飛鳥のチンポを触らせて、記念写真まで撮らせた。

しかもそれを、リングの四面全てでやって観客を喜ばせたのだ。飛鳥自信は、首まで真っ赤になってその羞恥に耐えていたが、敗者として一切抵抗せず、レイプタイガーにされるがままに肉体を差し出して醜態を晒し続けた。

そして、四面の最後に健史朗のいるサイドのロープに飛鳥が蹴り飛ばされて来た時に、健史朗は一瞬だけ迷った後、あえてロープ際に駆け寄ってレイプタイガーこと武虎の前に出てみた。

目が合ったレイプタイガーは、一瞬だけ僅かに微笑んだ、ように健史朗には見えた。少なくとも、健史朗の存在を認識し、しかも驚いてはいなかったと言う事は間違いが無かった。

「じゃあやつぱり、とら兄ちゃんも、オレが来ることは知ってたんだ」その事を確認できて、健史朗はかなりホッとした。もし武虎がこのことを自分に秘密にしたままだったのなら、今後、どんな顔でジムで会えばよいかわからなかったから。

突然、降って沸いた不安が解消した健史朗は、目の前に差し出された飛鳥の肉体、特に、武虎にも負けない立派なチンポに気付いた。

さすがに飛鳥が気の毒すぎて気後れしていたが、不安が解消した開放感もあって、やはり楽しませてもらうことにする。

「ごめんなさい！お願いします」

そう言って、健史朗は飛鳥のペニスと淫囊に手を触れた。すでに大勢の観客に眺られた飛鳥のペニスは半勃起状態で、透明な粘液を垂らしていて、健史朗はその粘液を搾り出すようにペニスを抜き、淫囊の中の睾丸の形を確かめるようにコリコリと觸った。

「っんんああ！」

苦痛に飛鳥が漏らしたうめき声に刺激され、健史朗はさらに意地悪を思いついてしまう。

「…本当にごめんなさい！」

そう言って、健史朗は飛鳥の陰毛を、数本纏めて引き抜いた！



「ぎゃあっ！」
たまらず悲鳴をあげた飛鳥に周囲の観客は大笑いする。
「悪いガキだな！将来が楽しみだぜ！」
リング上から、レイプタイガーがニヤリと笑って声をかけてきた。

「ジムの先輩が悪い人ばかりで、イロイロ教えてくれるんだ！」
健史朗も、ニヤリと笑ってそう言い返してやる。
「そうりや、最高のジムだな！」
レイプタイガーは大笑いして飛鳥の尻をパン！と叩いた。

結局、飛鳥の陰毛はそれからさらに数人に奪られて、最後は、レイプタイガーの命令で公開オナニーを強制されて、射精の様子が会場の大スクリーンに映し出された。

飛鳥の公開射精が終わると、レイプタイガーは自分で紐パンファイトショーツを脱ぎ捨てて観客席に投げ入れ、勃起したままのズル剥けペニスを改めて観客に披露した。

そして、射精の終わった飛鳥を、幼児におしっこをさせる時のような格好で背後から抱え上げて、自らの勃起ペニスの亀頭を飛鳥のアナルに押し当てながら、耳元で囁いた。

『へへっ、いいザマだな、伸。やっぱり止めといたほうが良かったんじゃないのか？地下格闘技なんてさ』

レイプタイガーの熱い亀頭をアナルに感じて身じろぎながら、飛鳥は気丈に小声で反論する。

『うるせえ！俺らは、表も裏も絶対王者な誰かさんと違って、イロイロと事情があるんだ。しかもお前とすぐに再戦できたから、上出来さ』

『ボロ負けでもか？』

『次は勝つ！今日負けたのは俺が弱いだけだ』

『楽しみにしているぜ』

レイプタイガーは、そのまま大きく開かせた飛鳥の両足をロープの最上段にかけて、グローブを履いたままの飛鳥の両腕も、そのロープの外にだらりと下げさせた。

そうすることで、飛鳥のチンポばかりか、アナルまでが観客席から丸見えになり、レイプタイガーのペニスが飛鳥のアナルを犯していく様子がすべて完全に見えるようになるのだ。

『…くそう』

さらに、飛鳥は目の前にあるカメラを見て無念そうに呻いた。

TTV、筒テレビという会社のテレビカメラだった。

この会社は、イロイロあっていまでは非合法の地下放送局だが、視聴者数は地方のローカル局などより遥かに多いといわれている。

『気付いたか。せつかくだから、お前が無様にレイプされる様子を全国放送してやるから感謝しな！』

レイプタイガーは意地悪くそう言うと、いきなり予告なく、飛鳥のアナルにズル剥けの巨根を一息にねじ込んだ！

「ぐあああああっ！」

飛鳥の悲鳴が会場で響き渡り、次の瞬間、観客の大歓声が飛鳥に降り注いで飛鳥を叩きのめす。

さらに、レイプタイガーは、情け容赦なく飛鳥の腹の中を太くて長いペニスで激しく深く突きまくり、前立腺や直腸をめちゃくちゃに撪られた飛鳥は、無様で悲痛な悲鳴や嬌声を大声であげまくりながら、涙目のアへ顔を全国に晒しまくった。

「…うわあっ…」

その様子をすぐ目の前で見ていた健史朗は、全身の血が沸き立つような興奮を感じて身動きできなくなっていた。

「…っあ」

そこへ、スマホが振動して着信を知らせてくる。

健史朗は、目は飛鳥の痴態からはなさずスマホを確認すると、なんと輝からの電話着信だった！

「えっ！…はい！テルちゃん！今、何処？…えええ？」

輝は、慌ててスマホを耳に当てた健史朗の問いには応えず、一方的に話して問答無用で切ってしまう。

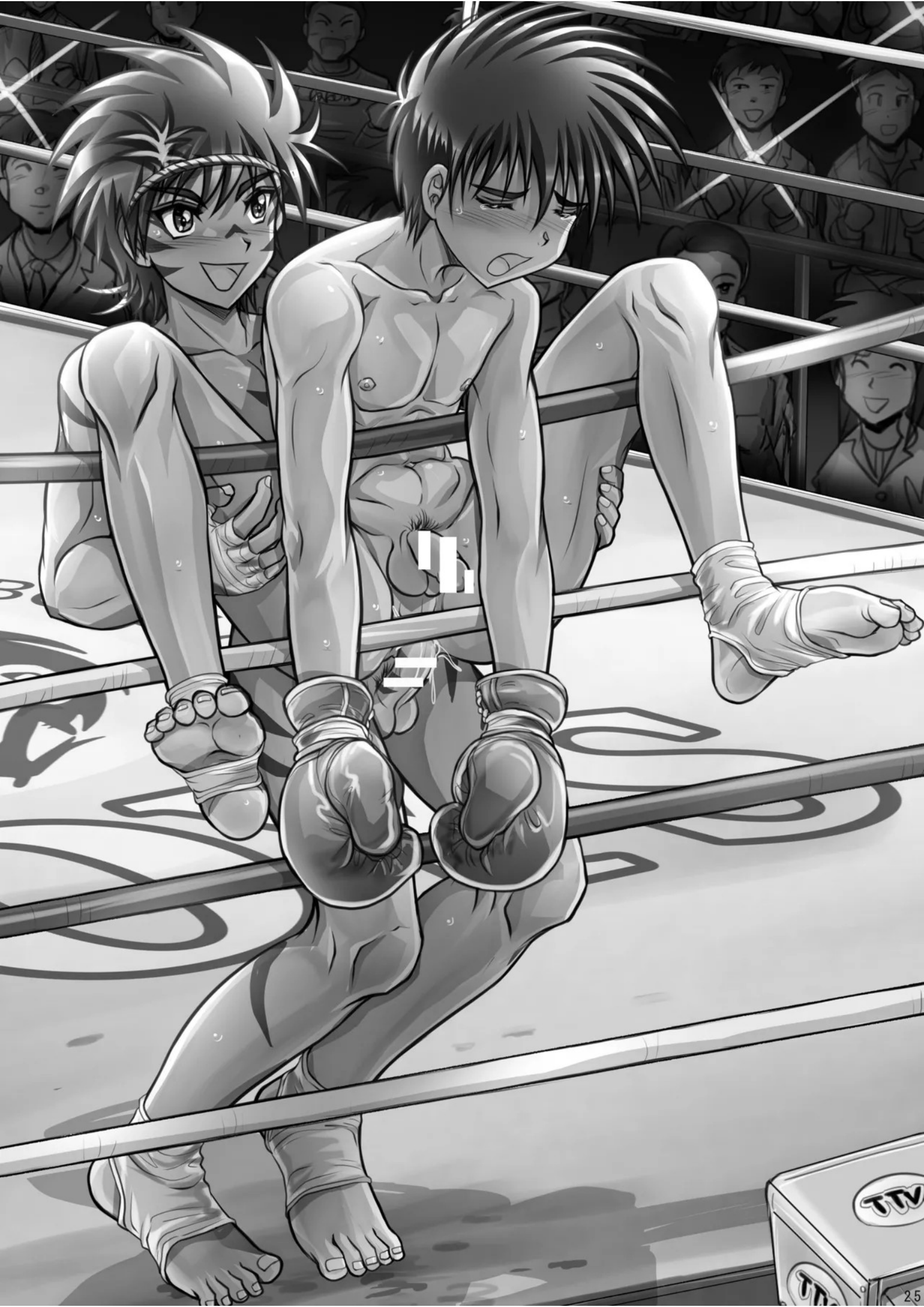
「…そんな、いまずが楽屋に来て言われても…」

「…そんな、いまずが楽屋に来て言われても…」

「…そんな、いまずが楽屋に来て言われても…」

「…そんな、いまずが楽屋に来て言われても…」

「…そんな、いまずが楽屋に来て言われても…」





「っお、お前らあ？」
レイプタイガーの頓狂な声とほぼ同時に、観客の驚きに満ちた歓声も沸きあがり、それまで、無様に失神してリングに大の字で放置されていた飛鳥を様々な角度から映し出していた会場内のカメラも、一斉に切り替わってレイプタイガーと乱入した少年二人を映し出した。

飛鳥の壮絶な公開レイプが終わり、全裸のまま失神した飛鳥をマットに横たえて晒したレイプタイガーは、恒例のファンサービスとして、全裸でペニスを完全勃起させたまま、ゆっくりリングを一周して観客に手を振って歓声に応えていた。
そこに、普通のフアイトショーツに、それぞれ赤と青のグローブを履いた輝と健史朗の二人が、突然、青コーナーからリングに上がり、さらにそのまま、間髪いれずにレイプタイガーに前後から襲い掛かった！

健史朗はレイプタイガーの背後から抱きついて自由を奪い、輝は正面から膝蹴りでレイプタイガーの急所を狙ったのだ。
さすがのレイプタイガーも、まったく予想外の展開に対応が遅れて健史朗に背後を取られることを許してしまい、さらに輝の膝蹴りも完全にはかわしきれなかった。
しかし、そこは百戦錬磨の絶対王者で、初手のダメージは最小限に食い止めて、アツと言う間に体勢を立て直してしまう。



「つうがあっ!!!」

健史朗は、レイプタイガーの縦横の激しい揺さぶりで体勢を崩され、さらに脇が甘くなつたところに、鋭い肘打ちを情け容赦なく叩き込まれて、簡単に吹き飛ばされた。

「悪い子にはお仕置きが必要だな!」

レイプタイガーはそう言ってニヤリと笑うと、リングに転がった健史朗の鳩尾を器用に蹴り飛ばした。

「うぎいっ」

健史朗は悲鳴をあげてうずくまり、意識はあるが動けなくなる。

「ちよっと、そこで待ってろ」



「ケンシロ!」

レイプタイガーを背後から抑えていた健史朗が吹き飛ばされて潰され、レイプタイガーと正面から向き合うことになった輝は、それでも不敵に笑って爛々と目を輝かせ、レイプタイガーの目を真っ直ぐ見た。「ふんっ! 生意気な目をするようになったな。覚悟はいいな?」

楽しいに言うレイプタイガー、というよりは、この瞬間はジムの先輩の『武虎』に、輝も楽しそうに頷いた。

輝も、最初から勝てるとはまったく思っていない。目的の一つ目は、本気の武虎と闘ってどこまでやれるか試すこと、あえていえば、本気で叩きのめして欲しいということだった。

武虎もそのことを理解したので、情け容赦なく叩きのめすつもりだ。「いくぞ」

武虎が小さく呟いた瞬間、輝も精一杯の攻撃を仕掛けるが、難なくかわされてしまい、強烈な膝蹴りを腹に叩き込まれてマットに沈む。

健史朗に続き、輝をマットに静めた武虎は、レイプタイガーとして観客の声援に応えて、再び大きな声で宣言をする。

「今日のお客さんは超ラッキーだぜ！見ての通り、トラの檻に子犬が二匹紛れ込みやがった！チケット代はそのまま、延長戦だ！」

レイプタイガーの宣言に会場は大歓声に包まれる。

そして、会場内の巨大モニターに健史朗と輝の顔写真が出て、フルネームと年齢、オナニーの数やアナルバージンの有無が表示された。

「こいつらは、二匹ともアナルバージンの子犬だが、人生でたった一回だけの、初めてのオトコがオレ様、レイプタイガーで、しかも、リングの上で見世物として二匹まとめて使われる、わいそうなガキだからな！みんな、顔と名前を覚えてやってくれ！」

そう言つて、レイプタイガーは、健史朗と輝の名前を読み上げる。

「チビで短髪は、相良健史郎！チビだけど小学校六年生だ。最近オナニーを覚えたばかりのお子チャマだけど容赦しないぜ！情け容赦なく根元まで突っ込んで、ちっちゃい腹をザーメンで満腹にしてやる！」

「もう一人、髪の長い女顔は、水瀬輝！中学校一年生だけど生意気なエロガキだ！こいつはワンワン泣かせてから、一生忘れられない悲惨なロストバージンにしてやる！」

レイプタイガーの残酷な宣言に、会場中がいつそう盛り上がった。

「さして、いつまで寝てる気だ？お仕置きの時間だぞ？」

鳩尾を打たれて激痛で動けなかった健史朗を、レイプタイガーは楽々と抱き上げて、尻をパンと叩いた。

「とら兄ちゃん！」

頬を赤らめて呟く健史朗に、武虎は、さらに小声で呟く。

『大丈夫か？手加減はしたつもりだけど』

『うん、全然大丈夫だよ』

健史朗もさらに小声で呟き返す。

観客のヤジと歓声が鳴り止まない中、レイプタイガーは健史朗の両腕をロープの二段目に掛けさせ、健史朗の両足を自分で左右のわきの下に抱えて固定する。

これで、健史朗のアナルを、レイプタイガーの太くて長いズル剥けペニスでロックオンする体勢になった。

観客席からは挿入部分がほぼ見えないが、特殊なカメラが絶妙の角度で撮影していて、会場の大スクリーンには健史朗のアナルに、レイプタイガーの亀頭があてがわれる様子が高画質で映し出された。

そして、それを見て健史朗はますます頬を赤らめる。

『バカだな、お前と輝は、今度の正月休みにホテルに連れ込んで、豪華なベットでやさしく抱いて、アナルバージンを奪ってやるつもりだったのにさ。でも、もう手遅れだ。お前の初体験は見世物として晒しモノになって、悪夢のような激痛で絶叫することになる』

武虎としての言葉に、健史朗は小さく頷く。

『うん、そうして欲しいんだ。やってよ』

健史朗の言葉に、武虎は少し目を見開いて、ニヤリと笑った。

そして、観客に向けて告げた。

「さあ、よく見ておけよ！アナルバージン喪失ショー一発目、行くぜ！」
次の瞬間、レイプタイガーの艶やかな亀頭が、健史朗の小さいアナルにズドンと押し込まれた！

「つぎやああああああつ！」

健史朗の絶叫が会場で響き渡り、満員の観客からは一斉に大きな拍手が沸き起こった。

そして、その拍手が鳴り止まないうちに、レイプタイガーはペニスをさらに奥まで一気に挿入した。

「うがああつ！」

健史朗は涙と鼻水を一緒に垂れ流しながら気絶した。



「おらあつ！健史朗は見事に散ったぞ！お前はどうかんだ！」

「パアン！と肉を叩く音が会場に響き渡り、観客からは笑い声と、もつとやれ！という声が湧き上がった。」

「ロープに腕輪と鎖で繋がれた輝は、尻をリングにむけて突き出す体勢をとらされて、その尻をレイプタイガーが素手で叩いているのだ。」

「酷いよお！なんでボクばかりイ！」

既に三十発は叩かれて輝の丸くて白かった尻は、赤いリングのようになり、観客を沸かせていた。

健史朗がアナバージン喪失ショーで壮絶な絶叫と気絶を披露して観客を満足させたことで会場の雰囲気が変わり、今度はむしろコミカルな見世物を期待されていると判断したレイプタイガーが、輝の尻をオモチャにして観客と遊んだ結果だった。

すでに輝は泣き出して、それも観客を一層喜ばせている。

「もうカンベンしてよお！お願いだから、早くボクのお尻を犯して！どんな酷いことをされてもいいからあ！」

輝の泣きながらの懇願は、マイクにのって大音量で会場中に流され、観客達の爆笑を誘った。

「しようがねえなあ！この淫乱小僧め！人に何か頼むときは、もっと言い方があるんじゃないか？おらあ！」

レイプタイガーは、さらに「パアン！」と一発叩き込む。

「ごめんなさい！ボクのお尻の穴を、ぶつといオチンチンで犯してください！お願いします！」

「違う！」

さらに「パアン！」ともう一発！

「ええくん！もうわかかんないよお！」

「問答無用で、さらに「パアン！」

「えつと、バカでアホで淫乱なボク、水瀬輝の処女アナルを、覗きたくて、お客さんとレイプタイガー様に捧げます！心の底からお願

します！ボクのアナルで遊んで楽しんでください！」

「とりあえず、勢いでもう一発パアン！」

「まあ、ギリで及第点だな」

「じゃあ、最後の一発余計じゃないかあ！」

輝は涙をボロボロ零しながら抗議するが、さらに、もう一発パアン！

『ひどいよつ！トラ君！』

『悪いっ！客の受けがよくて調子にのつた』

リング中央の『TAKETORY』コーヒの『BOYS』ブランドの esponサーログの上で、輝は大開脚した足の足首を左右それぞれの手首に鎖で繋がれ、アナルを天井に向ける体勢で寝かされていた。

そして、レイプタイガーは輝の左右の尻肉を掴んで腰を落とし、龟头を輝のアナルにあてがっていた。

カメラワークの都合で僅かな時間だがこの体勢で待機している間に、輝は武虎に涙ながらに小声で抗議したのだ。

『悪いついでに、ガチで乱暴に犯すから。健史朗みたいに、絶叫して泣き叫んで気絶するまで廻るからな』

『：それはそのつもりだったけど、お尻叩かれるのは聞いてない！』

『いいじゃねえか。お前ら揃ってマゾっけがあるんだろ？』

『そうじゃなくて！』

『はい、時間切れ！』

次の瞬間、レイプタイガーは龟头を輝のアナルに打ち込んだ！

「ぎゃあああああああつ！」

輝の悲鳴が終わる前に、レイプタイガーは一段と深くペニスを挿しこんで輝の腹の中をグリグリと乱暴に廻り犯し、さらに再び深く出し入れをしてペニスを輝の前立腺に叩きつけた。

「うげええつ！」

輝は目を剥いて絶叫しながら、だらだらと精液を垂れ流した。



「はあああんっ！ああん！はああん！」

輝は空ろな目で荒い呼吸で嬌声を上げ続けていた。

輝のアナルバージン喪失の瞬間から既に五分、レイプタイガーは執拗に輝のアナルを犯しているが、輝が失神する気配はなかった。

『：そろそろ頃合だな』

そう呟いたレイプタイガーが、輝のアナルからペニスを引き抜いた瞬間！レイプタイガーの首に太い腕が回されて一気に引き上げられる。

「今度はもう一回、こっちの相手してくれよ！」

「っ！お前はっ！」

自分の背後をとった人間を確認してレイプタイガーは驚愕する。

最初に倒して敗者として徹底的に鬨り、全裸で失神のまま放置していた飛鳥伸が、いつの間にか意識を取り戻していたのだ！

飛鳥は、全裸のままレイプタイガーの首を固めて離そうとしない。

あれだけ痛めつけられ、消耗させられたはずなのに、その力はあまりにも強力で健史朗のように振りほどくことは不可能だった。

「キサマああ！何のつもりだ！」

焦って怒鳴るレイプタイガーに、飛鳥は面白そうにとぼけた。

「いやあ、ちよっとクールダウンに付き合ってもらおうと思って」

そんなワケあるか！と怒鳴ろうとしたレイプタイガーは、目の前に現れた健史朗に気付いて顔色を変えた。

「健史朗お！お前もかあ！」

公開アナルバージン喪失ショーで、レイプタイガーの巨根を乱暴にアナルに突っ込まれて絶叫しながら気絶していた健史朗もいつの間にか意識を取り戻して、包茎チンポを振り回しながらレイプタイガーに駆け寄ってきていた。そしてそのままの勢いで膝蹴りをレイプタイガーの鳩尾に炸裂させた！

「うごおっ！」

飛鳥に強力に固められた状態でほとんど身動きぬまま、健史朗の膝

蹴りをまともに喰らったレイプタイガーは悶絶して身体を折った。

そして、健史朗は間髪いれずに、レイプタイガーの腹にドカドカとパンチを叩き込んだ。

「うごおおっ！」

飛鳥は自分自身がダメージを受けるのも厭わず、レイプタイガーの身体に密着して完全に固めて逃がさない。

そうして、よく鍛えられた筋肉サンドバックとなったレイプタイガーの肉体に、健史朗は情け容赦なくパンチとキックを叩き込み続ける。

「がああああっ！」

しかし、レイプタイガーも文字通り歯を食いしばって猛攻に耐えて反撃のチャンスを狙っていて、予断を許さない。

観客は、突然起こった奇跡の攻防にしばらく声をあげることすら忘れて見入っていたが、ある可能性に気付いた観客達は、一気に盛り上がった健史朗と飛鳥を応援し始める。

そして、前触れもなくゴングが会場に鳴り響き、それを聞いた観客は拍手と大歓声で歓迎した。

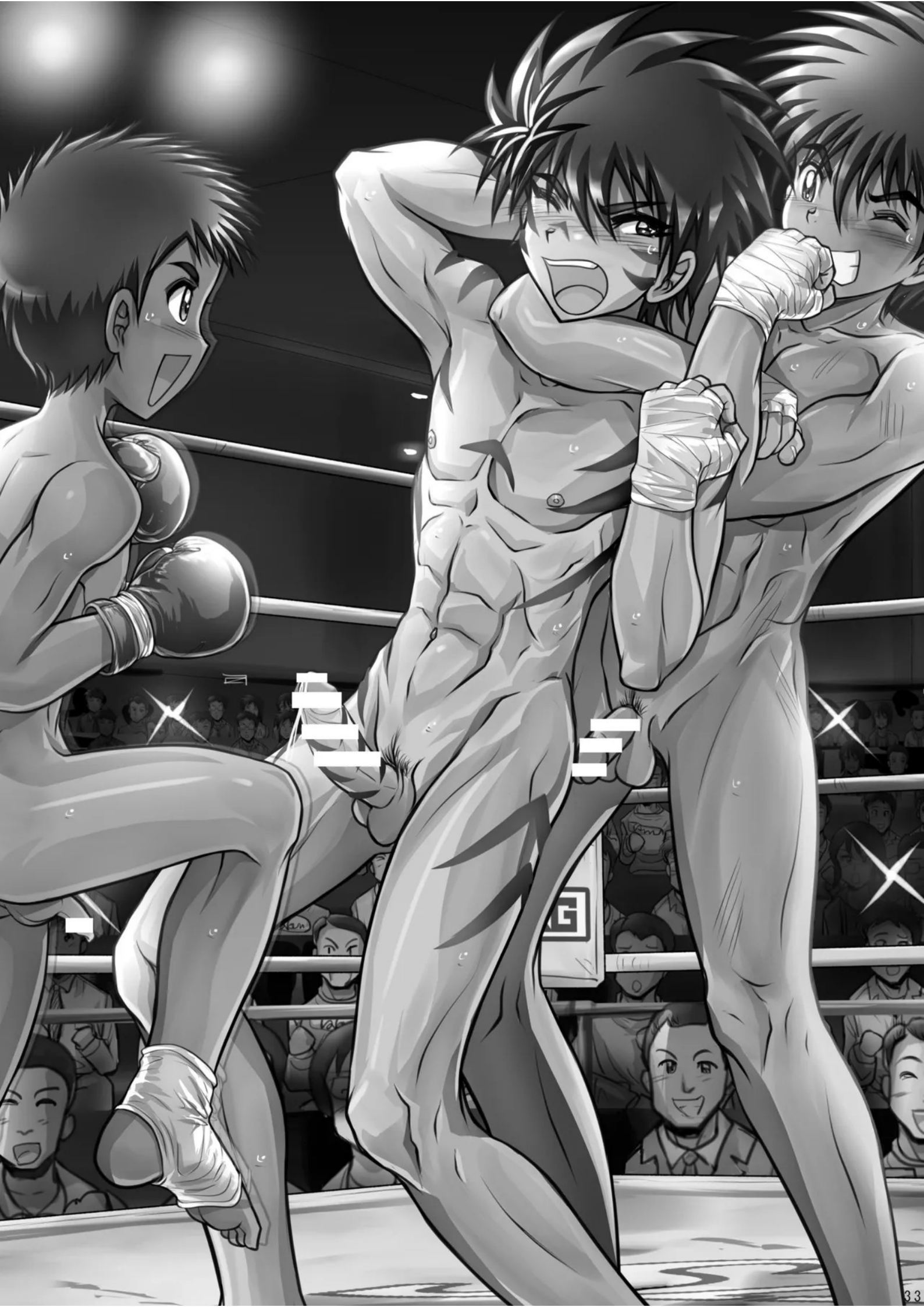
なぜなら、このゴングは、この闘いが運営サイドから公式に試合と認められたことを意味するものであり、つまり、あの絶対王者のレイプタイガーが負ける瞬間に立ち会える可能性が出てきたのだ。

もちろん、闘っている本人達もそのことはわかっていて、レイプタイガーは雄叫びを上げながら全力で飛鳥を振りほどこうとあがき、飛鳥も絶叫しながらそれを阻止しようと力を込める。

健史朗は、自分の非力なパンチやキックでは普通にやっても通用しないことを悟り、レイプタイガーから一気に距離をとって再び全力で駆け寄っていく。

助走で勢いをつけた健史朗の膝蹴りが、今度はさらに性格にレイプタイガーの鳩尾を痛打した。

「うごおっ！」



「おらああ！もつとチンポと乳首をおつ勃てる！」

飛鳥の打ち下ろした竹刀が、パァン！と武虎の太ももを痛打する。

「ぐああっ！」

公開処刑されるために、全裸で両足を大きく開いて逆さ吊りにされている武虎は、輝に虎柄のメイクを落とされていく自分自身を、会場的大型モニターで見て改めて敗北を実感した。

レイプタイガーは、健史朗の膝蹴りを鳩尾に叩き込まれて意識を失い、ついに敗北した。

意識を取り戻して最初に見たのは、泣きそうな健史朗と、困ったような表情をしている輝の顔だった。

その瞬間、レイプタイガーは自分が敗北したことを悟った。

そして、運営サイドとの約束で、敗北と同時に本名を公開する約束だったことを告げたのだ。

「うん、これで顔のメイクも綺麗に取れたよ」

メイク落としを持った輝が、武虎の頬を最後に一拭きして言った。

すでに大晦日の夜も遅い時間だが、観客はほとんど帰らずにその様子を感じ深げに見ている。

レイプタイガーが長谷部武虎であることは、覆面ではない以上は有る程度は周知の事実だったが、公式に公表されるとなると、やはり大きなニュースだった。

しかも、絶対王者がついに公開処刑されて公開レイプされる場面に立ち会えるというチャンスは、よほどの事情がない限りは捨てがたいものなのだろう。

既に、武虎のアナルには太いバイブが突っ込まれ、強制勃起させられたペニスの尿道には、電撃を発生するニードルが挿されていた。

また、右の乳首は、健史朗の手で、強力で電撃も発生するクリップ

で挟まれていて、左の乳首も挟むべく、健史朗はクリクリと武虎の左乳首を勃起させようと煽っている。

「準備完了！」

健史朗が、武虎の勃起させた左乳首をクリップで挟んで公開処刑の準備は整い、あとは誰が最初に始めるかを決めるだけだった。

「どうする？後輩のお前達がやり辛いなら俺がやるし、むしろ後輩だからこそやりたいなら、お前達に譲るぜ？」

飛鳥の言葉に、健史朗と輝はお互いを見て頷きあった。

「やらせて！」

満面の笑みで声を揃える健史朗と輝を見て、飛鳥は、目の前にある武虎の大きめの金玉を右手で掴んで弄びながら、楽しそうに言う。

「いい後輩を持ったな。コイツも片方くらいくれてやったらどうだ？」

「：まったくだぜ。下手すりゃ二つとも持っていかれそうだ」
武虎はなんともいえない微妙な表情で唇を歪めた。

「じゃあ、始めるよ！」

まるで、キャッチボールでも始めるような口調で、健史朗はコントローラーのスイッチを入れた。

ほんの数秒、武虎の身体から電子音が聞こえたあと、武虎の両方の乳首のクリップと尿道のニードル、そしてアナルのバイブから、バチンっ！という音とともに高圧電流が放出された。

「つぎやあああああああああああああああ！」

武虎は絶叫しながら、文字通り跳ね踊るように悶絶する。

そして、その武虎を、輝の振り下ろす竹刀がめつた打ちにしていく。

竹刀のターゲットは主に太ももや腹、そして背中だが、五発に一発は金玉を直撃していて、竹刀が金玉を直撃した瞬間には武虎の呼吸が一瞬とまって全身が激しくのた打ち回った。



「こりゃあ、贅沢な肉オナホールだな！」

飛鳥は、いつの間にか持ち込んだスマホで写真を撮りながら、冗談にしては本気すぎる口調で笑った。

「確かにそうだよね！なんとと言っても、材料は箭カップの王者で、しかもレイブタイガーでもある長谷部武虎だもんね！」

輝は、飛鳥の言葉に同意しながら、武虎のアナルに勃起ペニスを挿入して激しく出し入れしている。

「贅沢すぎて、なんか心臓がドキドキするよ！」

健史朗も、勃起ペニスを武虎の口に入れながら興奮気味に同意する。

飛鳥の言葉は、両足を開いた状態で海老反りにして器具で固定した武虎を、健史朗や輝のチンポの高さでワイヤーで吊るしたものを表現する単語としては、なかなか秀逸といえた。

健史朗と輝による過激な公開処刑は、大晦日の夜遅くまで残った観客達を十分に満足させることができた。

しかし、公開レイブについては、健史朗と輝の二人が体格的に武虎より大きく劣るため、物理的に難しいと言う問題があり、急遽用意された仕掛けがこれだった。

武虎自身は、飛鳥と、乱入した健史朗と輝の三人を公開処刑してからレイブし、さらに、かわいい後輩達による情け容赦のない公開処刑も受けてさすがに消耗が激しく、憎まれ口を叩く気力も残っていないのか、されるがままに、肉オナホールとして使われている。

そして、武虎が何も言わないのを良いことに、健史朗は武虎のグロームを武虎の金玉の根元に結んでぶら下げ、輝は、武虎の右太ももに『長谷部武とら』と悪戯書きをして遊んですらいた。

公開レイブの締めとしては、新年を迎える瞬間に、健史朗と輝、そして飛鳥の三人が同時に、武虎の顔面にザーメンをぶっかけて新年を祝い、会場全体が暖かい拍手に包まれて、イベントは幕を閉じた。

「とら兄ちゃん、大丈夫？」

「トラ君、無理はしないでね」

箭スポーツセンターの第一体育館を出て、運営側が用意したホテルに向かうタクシーの中で、口々に自分に対する心配を口にする後輩達に、武虎は苦笑する。

「おいおい、俺はそんなにヤワじゃねえぞ？むしろ、お前達の方こそ大丈夫か？最後は逆襲されたけど、実際には、俺がお前達を、かなり酷く痛めつけたんだぞ？」

「うん！大丈夫！あちこち痛かったけど、とら兄ちゃんのお尻を犯したら全然大丈夫になったよ！」

ニヤリと笑って言う健史朗の頭を小突きながら、武虎は輝のほうを見て意地悪く言ってみる。

「テルも平気になったか？俺の金玉を叩きまくったらさ！」

「うん！なったよ！なんかすごく楽しかった！トラ君、また金玉を叩かせて欲しいって言ったら怒る？」

「おうっ！即、ぶっ殺す！」

「えく！」

「えく！じゃねえよ。つたく、二人揃っておかしな事を覚えやがって」

「でも、とら兄ちゃん、セックスはおかしな事じゃないよね？これからは、どんどんセックスしてくれるよね？」

無邪気に言う健史朗に、武虎は大事なことを聞く。

「いいけど、お前は入れるのと入れられるの、どっちがやりたいんだ？」

「両方！」

「ボクは、お尻を使ってもらうほうだけでいいかな」

意外なことを言う輝に、健史朗が鋭い突っ込みを入れる。

「そのかわり、オレのお尻を使う気でしょ！」

「あ、ばれた？」

「いいけど、オレもテルちゃんのお尻使うからね！」





「おい！ちよつと待て！アレって隠しカメラじゃないか？っていうか、全然、隠れてないよな？あのカメラ！」

天井から吊り下がっている、ベットに向けられたカメラを見つけた武虎は、慌てて部屋の隅々まで見回してみる。

「…なんだこりや、カメラだらけじゃないか！」

最初に見つけたカメラ以外にも、簡単にみつかれる物だけで五台のカメラが堂々と設置されていた。

いつもは使わないが、今日は遅くなりすぎたので、運営側が用意したホテルに三人でチェックインして、既にシャワーは会場で使ってきたから、すぐに三人でセックスしようと全裸になってベットに上がったら、この有様だった。

「コレも選手の義務なんじゃないの？」

無邪気に言う健史朗の言葉に、輝も笑顔で同意する。

「そうだよ。今更じゃん！見せちゃおうよ」

「いや、でもっ」

さすがにプライベートは守りたい武虎の抵抗も空しく、無邪気で大胆な後輩二人にチンポと乳首を弄られて、武虎のズル剥けペニスはあるささり勃起してカウパー液を垂れ流し始めた。

「さすが！レイプタイガーのチンチンは高性能だね！あれだけ使って痛めつけても、まだこんなに元気だ！」

そう言って嬉しそうに勃起ペニスに頬ずりする健史朗と、乳首を執拗に弄って、耳を甘噛みしてくる輝に、武虎もついに観念する。

「ああもう！お前ら、今晚は寝かさないと覚悟しろ！」

おしまい





「おい！ちよっと待て！アレって隠しカメラじゃないか？っていうか全然、隠れてないよな？あのカメラ！」
天井から吊り下がっている、ベットに向けられたカメラを見つけた武虎は、慌てて部屋の隅々まで見回してみる。
「…なんだこりや、カメラだらけじゃないか！」
最初に見つけたカメラ以外にも、簡単にみつける物だけで五台のカメラが堂々と設置されていた。
いつもは使わないが、今日は遅くなりすぎたので、運営側が用意したホテルに三人でチェックインして、既にシャワーは会場で使ってきたから、すぐに三人でセックスしようと思えば全裸になってベットに上がったから、この有様だった。
「コレも選手の義務なんじゃないの？」

無邪気に言う健史朗の言葉に、輝も笑顔で同意する。
「そうだよ。今更じゃん！見せちゃおうよ」
「いや、でもっ」
さすがにプライベートは守りたい武虎の抵抗も空しく、無邪気で大胆な後輩二人にチンポと乳首を弄られて、武虎のズル剥けペニスはある物起してカウパー液を垂れ流し始めた。
「さすが！レイプタイガールのチンチンは高性能だね！あれだけ使っても痛めつけても、まだこんなに元気だ！」
そう言って嬉しそうに勃起ペニスに頻する健史朗と、乳首を執拗に弄って、耳を甘噛みしてくる輝に、武虎もついに観念する。
「ああもう！お前ら、今晚は寝かさなから覚悟しろ！」
おしまい



はじめまして&おひさしぶりです。
へたれ文字書きのた〜んけーですm(_ _)m

「地下なんちゃら」って浪漫ですよ。
今回は、ちんちん丸出しで闘う男の子、
という、わかりやすいコンセプトで一点突破を図ってみました。
今回も、痛々しい厨二設定がいっぱいあって、
それを考えるのが楽しくてしょうがなかったのは内緒です。
どこか一場面でも、皆さんの琴線に触れられたら幸いです。

2015年12月 た〜んけー
turn_k_vf@yahoo.co.jp

格闘少年丸出しマッチ

2015年12月29日 初版発行
発行/筍御飯VF
著者/筍屋&た〜んけー
ロゴデザイン協力/ひろレン!
印刷所/株式会社 プロス
連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp

冬コミ御参加の皆様メリークリスマス〜♪ (x☆x\バチッ
いや、これを書いているのがイブ当日なもんで イラスト担当の筍屋ですよ♪
この度は、この本をお手にとって頂き誠に有難うございましたm(_ _)m
今回は地下格闘技モノという事だったんですが
何しろ私もTKさんも「格闘技をする少年がエロい事になる」のは好物ですが
格闘技そのものには全くの門外漢なので絵の方も難航致しまして
久しぶりに作画も締め切りギリギリの攻防となりました(;;
そんな訳で色々とおかしな所が多かあるかと思いますが
一枚でもお気に入りの頂ける絵がありましたら幸いですm(_ _)m

それにしても毎度の事ですがTKさんの無茶振りには苦労します
オフ本の場合「K一発注主」を「読者」みたいな関係なので
さら〜と「見開きいっばいにエロいチェックをされる男の子多数の絵」
みたいな仕様書が出てきても「そんな面倒なもん誰か描くんじ〜!」
などと文句も言えずに睡眠時間を削って泣きながら描いたのでした
という事で皆様には来年の御多幸を TKさんには天啓を願いつつ笑!

2015年12月29日 筍屋

今回もお忙しい中、ロゴ作成でご支援を頂いた
ひろレン様には、この場をお借りして御礼申し上げますm(_ _)m

筍屋 takenokoya@yahoo.co.jp
竹藪館 <http://www.hi-ho-ne.jp/su-oh/keikoku.htm>
(御意見 御感想ありましたら宜しくお願いします)

2015 winter



TAKETORY
COFFEE
BOYS
BOYS

TAKETORY
COFFEE
BOYS
BOYS

筍御飯 V F